



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	戦艦大和からキリスト教へ : 吉田満における信仰と平和
Author(s)	石川, 明人
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 127, 41(右)-79(右)
Issue Date	2009-02-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35665
Type	departmental bulletin paper
File Information	ISHIKAWA.pdf



戦艦大和からキリスト教へ

——吉田満における信仰と平和——

石 川 明 人

「肉の重荷を負った人間は、美しい抽象的な「平和」そのものを、生きることとはできない。それぞれにあたえられた役割を果たしながら、「平和」を求めて自分を鞭打つことだけが、許されているのである」

吉田満「青年の生と死」より¹

一 はじめに

本稿は、『戦艦大和ノ最期』の著者として知られる、吉田満の死生観や平和論についての考察である。特にここでは、

戦艦大和からキリスト教へ

吉田の戦後生活のほとんど全てがキリスト教信仰と共にあったことに注目し、「信仰」との関連から彼の思索を読み解いていくことを課題とする。

吉田満はいわゆる学徒出陣で短い大学生活を終え、海軍に入り、やがて副電測士として戦艦大和に配属される。そして一九四五年四月、大和は「天一号作戦」として軽巡洋艦矢矧および駆逐艦八隻とともに特攻に出ることになる。だが航空機の援護もない艦隊は、目指す沖縄のはるか手前で米軍艦載機の猛攻を受け、吉田も約二時間のあいだ魚雷と爆弾と機銃弾にさらされる。艦が大きく傾き、ようやく総員退避の命令が出た後は、約三時間にわたって重油の漂う海を漂流するが、吉田は奇跡的に生還を果たした。その日生きて帰った大和の乗組員は、三千数百名のうち一割程度であった。彼は戦争が終わってまもなく、ほぼ一晩で『戦艦大和ノ最期』（以下『大和』と略記する）を書きあげ、出版には紆余曲折があつたがそれは結果として様々な反響をよんだ。その後も吉田は日本銀行に勤めるかたわらで多くのエッセーを書き、生と死、あるいは戦争と平和について、重要な問いかけを残した。それらは、大和という良くも悪くも当時の日本軍を象徴する巨大戦艦の元乗組員による文章として、しかも最後の特攻出撃の生還者によるものとして、多くの関心を集めた。だが、一連の「死」や「平和」に関する思索の背景には、吉田が戦後すぐにカトリックに入信し、その後プロテスタントに改宗しているなどの事実があることも忘れてはならない。彼は単に戦場体験だけをもとに人間や社会について考えたのではなく、そこには宗教的省察という側面があつたのである。

以下では、まず吉田の戦後生活におけるキリスト教とのかかわりについてその事実関係を整理する。その次に「死」に関する問題から入って吉田の信仰理解をたどり、最後に彼の平和論を信仰の問題との関連で考察することにした。

二 吉田満とキリスト教

吉田の生涯におけるキリスト教とのかかわりについて見ていくには、『大和』の執筆についてから話を始める必要がある。

今では戦記文学の秀作としての評価が定まっている『大和』だが、吉田はそれを最初はあくまで戦争体験の「覚え書」として執筆した。「自分がどのように戦争を戦ってきたかの跡を赤裸々に抉り出すことによって、戦後の平和な生活への足がかりとする」² ために書いたとも述べている。実際には吉田の父と疎開仲間であった吉川英治による執筆のすすめもあったのだが、少なくとも最初はあくまで自分自身の戦後の生活のために、ある種の心の整理として筆をとったようである。後に小林秀雄の推薦で雑誌『創元』に掲載されることになるが、GHQの検閲により全文削除されるなど出版は思うようにいかず、書き直しを繰り返すうちに修正版や口語体版など『大和』には最終的に合計で八種類ものバージョンが生れている。³ だが多くの人の目に触れるようになって、この作品に対する評価は吉田にとって必ずしも納得のいくものばかりではなかった。彼によると、いわゆる進歩的評論家の側からは戦争肯定、軍国主義鼓舞の文学であると強く批判され、また職業軍人の高級士官だった者たちからは大義を忘れた軟弱な作品だと攻撃されたのである。後に吉田は「何とさまざまな読み方をする人がいたことであろう」⁴ と回想している。

吉田は、戦争の中の自分というものをただ呪うだけでは戦後の新しい生活への道が開けるとは考えず、むしろ、自分がどのような戦争に協力したか、戦争協力行為は何を意味していたか、そのすべてが責められなければならない

いのか、あるいは許される部分もあるのか、といった問題を正面からみつめることが、まずなされるべき仕事だと考えたのである。⁵それが具体的には、現在からの価値判断を排したただ淡々と事実が語られる『大和』の執筆という作業であった。だから『大和』をもってして戦争肯定、軍国主義肯定といわれることに吉田は反論しないわけにはいかなかった。それは決して自分を弁護するためではなく、日本人全体に対し戦争の悲惨さと平和の意味の再考を促すためにも必要だったのである。吉田はあの時代、ただ第一線の兵科士官として、当然なまでの血気に燃えていた。それが当時において彼や他の将兵たちに与えられた「責任」だったのである。与えられた任務を可能な限り果たそうというその昂りをも戦争肯定と非難するならば、「それでは我々はどのように振舞うべきであったのかを、教えていただきたい」と吉田は『大和』の「あとがき」で読者に問いかける。みな召集を忌避して死刑になるべきだったというのか、それとも怠惰で無責任な兵士として務めれば「平和主義的」だったとでもいうのか、という吉田の口調は、問いかけというよりもむしろ憤りのようである。

吉田自身も自覚しているように、確かに『大和』には敵愾心や軍人魂や日本人独特の矜持が表現されている箇所もある。だが、当時の戦いのなかにおいては、多くがそうしたものを持たずにはいらなかったというのが端的な事実であり、それらに触れたということだけでもって「戦争肯定」だというレッテルを貼るのはあまりに短絡的だと吉田は感じたのである。世間の多くは、戦争が終ると、戦時中の自らの言動の実態を正直に振り返ることはせず、ただ戦争や軍隊にかかわる一切を否定しさえすれば「平和主義者」になれるとたかをくくった。だが多くの将兵にとって、戦陣の過酷な生活、出撃の体験は、この世の最後のものだったのである。若者が人生の最後に、いやおうなく巻き込まれた状況の中で何とか生甲斐を見出そうと苦しみ、何か肯定的なものを掴み取ろうとあがくことそれ自体を十把ひ

とからげに悪だと裁くことが「平和」だというのはあまりに安易であることを、吉田は戦中派の一人として口に出さずにはいられなかった。

「戦争を一途に嫌悪し、心の中にこれを否定しつくそうとする者と、戦争に反撥しつつも、生涯の最後の体験である戦闘の中に、些かなりとも意義を見出して死のうと心を砕く者と、この両者に、その苦しみの純度において、悲惨さにおいて、根本的な違いがあるであろうか」

未来に戦争を起こさぬようにすることは確かに「平和的」であろうが、過去の戦争や軍隊を全否定することが常に「平和的」だとは限らない。それは一歩間違えば「逃避」や「忘却」でしかなくなるであろう。吉田によれば、彼らが体験した戦争は一切がただ空しいというではなかったという。最初から終りまで空しいと分りきった茶番劇が進行したのではなく、登場人物は端役の一人にいたるまで、それぞれの悲劇を背負いつつも終幕まで息をつめてそれに執着せざるをえなかったのである。戦争を体験していない現在の多くの日本人は、こうした点をもっと丁寧に想像せねばならないであろう。

『大和』がさまざまな読まれ方をしたことで、吉田は自分自身への反省としても、また日本社会への問いかけとしても、思索を続けさせられることになった。もちろん『大和』を評価してくれる人は少なくなかったが、そうした人たちの言葉も戦後の吉田の心に安寧をもたらすには十分ではなかったようである。こうした中で、彼の人生の大きな転機となる出来事が起こる。それは読者の一人であったカトリックの司祭今田健美との出会いである。それは『大和』

がGHQの検閲により前文削除されたころのこと、神父との出会いは正確には『大和』出版以前である。出版前に幾人かに筆写してもらった原稿の一つがめぐりめぐってその神父のもとに渡ったのである。ある日その神父から、泊りがけで話に來いと連絡が吉田に届いた。そのころ吉田はまだキリスト教信仰とは無縁であつたし、むしろ否定的でさえあつたが、それでも「何か自分に訴える真実を求めるあまり」、彼のもとへ「思い切つて乗りこんでいった」のである。

二人は一夜を語り、また床を並べて語り明かした。神父は吉田に対して何かを語るといふよりも、むしろ吉田の得意な話題に誘ひ、思うままにしゃべらせてその内実を掘り下げ、根底にまで話をもつていくように導いたという。神父は結局その夜、神という言葉もキリストという言葉も、また信仰という言葉も宗教という言葉も、ついに口にできなかった。そのことは吉田にかえつて強い印象を残したようである。やがて彼はその神父こそ、『大和』を最も深く誠実に読んでくれた人であると確信するようになる。彼はその日の神父との対話について次のように述べている。

「その人は、ことさら私の意を迎えるような一言半句をも口にしなかった。その手稿を両の手に抱いてそれを握りしめながら、口を切った次の簡明な言葉——繰り返し拝見しました。声に出してよみました——を私はどんな風に聞いたであらう。初めて、自分の苦衷を汲み共に進んでくれる人に逢えたよろこびが先ず私を領したのであつた。」

当時に関する吉田の文章をみていくと、まず彼を惹きつけたのは、キリスト教の教義そのものではなく、また聖書のなかの言葉などでもなく、この神父の人柄であつたようにも思われる。ただし、単純に人間としての神父自身に好

意や尊敬の念をもったことが信仰に直結したのではなく、吉田は神父の人格の奥にある「何か」を見出し、それが彼における「信仰」の芽生えを促したと考えねばならないようである。これは微妙な差異ではあるが重要である。彼は信仰への過程を綴ったエッセー「死・愛・信仰」のなかで、神父について次のように述べている。

「神父は私の前に、知友でも師でも兄でもなく、まさに父となった。その人間性のゆえにはなく、神へのわれとひとしい奉獻のゆえに、神のごとく父であった。私は神父を通して、そのかなたのものを実感した。神父をして神父たらしめ、神父をつかわしたそのものの息吹を感じた」¹⁰

もしたただ神父の「人格」に対して惹かれていただけであれば、それはやがて彼への過剰な期待となり、彼自身に何か絶対的なものを要求し、しかし人間である以上ついには期待を裏切られ絶望にいたったかもしれない。だが吉田は神父の中に「いちじるしく人間的なもの」と同時に、それ以上のものを見出した。彼の言葉でいえば「神父の中の、人間的なものと、超人間的なものとの併存」¹¹である。右の引用で彼のいつている「神父をつかわしたそのものの息吹」とは、すなわち「神の息吹」であろう。

吉田は概ねこの神父との出会いの日を境にキリスト教信仰へ向かう。保阪正康は、彼が編集した吉田の文集『戦艦大和』と戦後『ちくま学芸文庫』の「解説」で、吉田は復員して四、五年たってから信仰をもつようになったと述べている。¹²だが正確には、終戦の翌年から吉田と神父との交流がはじまり、その約二年後（一九四八年のイースター）に吉田は洗礼を受け、日本銀行内でカトリック研究会を主宰するようにまでなっている。受洗までの期間も勉強をし

ていたことはほぼ間違いないであろうから、要するに彼の戦後は、最初の一年を除いて全てキリスト教信仰と共にあったといつてよい。¹³

洗礼を受けた一九四八年には、吉田は『今田健美神父述・公教要理講解筆記録』をまとめてもいる。信仰に関するエッセー「死を思う」「死・愛・信仰」などが発表されたのもこの年である。吉田は教会での活動に積極的で、同年のクリスマス祝会では『犠牲』と題する四幕物のドラマの脚本も執筆している。その脚本は現存していないが、内容はキリスト教の真理性をめぐる葛藤になやむ青年と神父との対話を軸とするものだったといわれている。吉田がいかに今田神父を敬愛していたかは、彼がこの年に今田神父へ捧げる短歌を多く残していることからうかがえる。¹⁴

吉田は翌一九四九年五月に中井嘉子と結婚する。だが嘉子はプロテスタントの家庭で育ったため、吉田は結婚前からカトリックとプロテスタントのはざままで悩むことになる。結婚式は受洗したカトリックの世田谷教会で挙げるが、このころからプロテスタントの日本基督教団駒込教会の牧師鈴木正久との交流がはじまり、その教会の礼拝に出席するようになったようである。

新しい家庭生活がはじまった翌年、一九五〇年九月、吉田は東大のグラウンドで友人たちと運動中に、サイダー瓶の破裂という奇禍にあい右眼を失明してしまう。そのため一月末まで仕事を休んで保養するのだが、おそらくその時期にゆつくりとした思索の時間を得られたのであろう。翌一九五一年に、プロテスタントへの改宗について詳しく触れたエッセー「底深きもの」を発表している（吉田のプロテスタント改宗については次章で触れる）。一九五七年（三四歳）に吉田は正式に日本キリスト教団駒込教会（一九五八年に西片町教会に改称）の教会員となる。また吉田はこの年から約二年間のニューヨーク勤務を命ぜられ日本を離れており、その間にはアメリカの教会での体験に関する短

い文章も残している。アメリカの教会における人々との交わりも、吉田のキリスト教理解に少なからぬ影響を与えたと思われる。森平太は、吉田は信仰に対して決して「熱狂的」ではなくむしろ「醒めた目」をもっていたと述べているが、それはカトリックからプロテスタントへの改宗、そしてアメリカ生活で現地の教会に足を運びそこで得た人々との交流などを通して、キリスト教会や信仰の問題を相対化して捉える視点を養ったからであろうと思われる。この一九五七年から、吉田は『西片町教会月報』に頻繁にエッセーを載せている。この時期は吉田に対する講演や執筆の依頼が多くなっていたが、それにもかかわらず、亡くなるまでの二年間にこの教会の小さな月報に一六回も文章を載せていることは、吉田とこの教会とのつながりの濃さをあらわしているともいえよう。

一九六七年（四四歳）のイースターの日の出来事も吉田の思索を見ていくうえでは無視できない。その日、吉田のかよっていた西片町教会の鈴木正久牧師が、日本基督教団総会議長として「第二次大戦下における日本基督教団の責任の告白」を発表した。これは戦後日本のキリスト教界において非常に大きな出来事であった（これについては四章で触れる）。鈴木牧師はそのすぐ後、一九六九年七月に亡くなったが、吉田は鈴木牧師の思想と生き方に深く感銘を受け、後に『鈴木正久著作集』（新教出版社）の編纂に尽力する。それが刊行されたのは吉田の死後だが、その第一巻の冒頭には、鈴木正久著作集刊行準備委員会代表の名で、吉田による「刊行の辞」が掲載されている。

一九七九年九月、吉田は肝不全のため五六歳の若さで永眠する。葬儀は東洋英和女学院マーガレット・クレイグ記念講堂でおこなわれた。葬儀の約二ヵ月後、日本銀行カトリック研究会の黙想会が開かれ、今田健美神父による特別追悼ミサも行われた。吉田をキリスト教へ導くきっかけとなった今田神父は、一九八二年に亡くなった。

以上が吉田とキリスト教との関係に関する主な出来事である。以下では、吉田の「死」や「平和」に関する思索の

中身と信仰的次元との連関を詳しく読み解いていくことにしたい。吉田は神父との出会いを神の摂理と捉えた。だが神父との出会いという外的な出来事だけが吉田の人生を大きく変えたのではない。吉田が神父との偶然的な出会いの中に神的なものを見出し、それを「御摂理」と捉えたことの背後には、やはり壮絶な特攻体験がある。自らが体験した「死」をどう捉えなおすかという彼自身の苦悩こそが、神父との出会いを宗教的次元へ導く出来事になったと見るべきであろう。あるいは、特攻の「死」の体験とあまりにコントラストが強かった戦後の平和な「生」への戸惑いと不安が彼を信仰に導いたといってもよいかもしれない。いずれにせよ吉田における「信仰」形成のプロセスを知るには、彼の生と死に関する考察に目を向けねばならない。

三 死と信仰

一九四五年四月七日の戦艦大和を中心とする沖縄への海上特攻隊全体の戦死者は、大和の二七四〇名の他、矢矧と八隻の駆逐艦で九八一名、合計で三七二一名にのぼっている。¹⁶ その日の壮絶な戦闘の様子は、受洗した一九四八年に書かれた「死・愛・信仰」では次のように回想されている。

「死が、血しぶきとなり肉片となって私の顔にまといつた。或る者は、まなじりを決したまま、一瞬飛び散って一滴の血ものこさなかった。他の者は、屍臭にまかれ恐怖に叩きのめされて失神し、身動きも出来ぬままなお生を保っていた。およそ人の訴えを無視し、ときと場所を選ばぬ死神の跳梁、生の頂点をのぼりつめて、死の勾配を逆

落ちながら、あばかれる赤裸々なその人間。蒼ざめたまま口を歪めてことされる者。女神のような微笑みをたたえ、ふと唇をとじる者。人生のような、芝居のような、戦闘の一局面。そこでは、一切に対する、想像も批判も連想も通用しない。ただ見、触れ、押し、抱くことが出来るばかりであつた¹⁷」

吉田によれば、自分たちの出撃が明確に「特攻」であると知らされたのは艦隊がすでに出港してしまつてからのことだつた。だが彼ら一同には必ずしも悲壮感はなかつたらしい。多くはいつそう陽気になり、互いに冗談を言つて笑つたりしていた。だが吉田はそれを、「勇敢」であるというよりは自分たちが確実に死ぬということを直視できない姿勢だつたのではないかと思ひ返している。また自分自身にも、特攻出撃によつて「底なしの猛訓練から解き放たれる」という「安堵」の気持ちさえあつたという¹⁸。普通人間の死というのは、それがいつどこでやつて来るのかわからないものであり、そこに死というものの本領があるといつてもよい。ところが特攻死では自分がいつ死ぬのかかなりの正確さにおいてわかつてしまう。そうした点をさして吉田は、特攻兵に強要される死には「実験室の匂いがして、生命の燃焼が希薄¹⁹」であり、また「器械的に用意された死は、その意味で死ではない。肉体の破壊ではあるけれども、人間の死とはいえない²⁰」という。『大和』では、「精神ノ死ニ非ズシテ肉體ノ死ナリ 人間ノ死ニ非ズシテ動物ノ死ナリ ムシロ死ニ非ズシテ死ノ小實驗ナリ²¹」とも書いている。

吉田が『大和』を発表した時、あのような劇的な死の叙述は、特攻を美化することにつながると批判する者も少なくなかつた。だが吉田は、あの作品の中で「大和」における特攻死は死の経験としてむしろ堪え易く、底の浅いものであることをはつきり書いたつもりであり、そもそも選択の自由は自分にはなかつたのだから、ただ与えられた戦争

の場における赤裸々な自分を、偽りなく再現しようと努めるしかなかったのだと答えている。²² 特攻死の死としての「底の浅さ」を再確認することが、実際にそれを体験した吉田にとっては、後の「生」のために、どうしても必要だったのである。彼は「死」と向き合った当時のことを次のように述べている。

「特攻」という美名のひびきや、巨艦の一員として出陣するのだという矜持の意識が、死の予感の周囲に、異常な昂奮の綾を織りなして、死をくみし易く甘美なものに思わせる。私はそうした薄膜を、死のまわりに、したがって戦いのまわりに張りめぐらしながら、その中に落ちこんだ自分の暗さを、安心立命の静けさだと思いあがっていた。²³

数日後あるいは半日後に確実に与えられる保証付きの死には、不安を抱く余地はないと吉田はいう。ただし、死の不安もない代わりに、死の実感もない。「一〇〇パーセント確実な死にあるのは、皮肉にも死の影だけである。勇敢な兵士たちは、死に臨んでなお勇敢だったのではなかった。彼らは死からもっとも遠いところで、最も無責任に自らを亡失することによって、死の確実さからのがれようとあがいていたに過ぎなかったのだ」といい、「度重なる米機の雷爆撃に乗艦が次第に傾き、水平線がほとんど垂直にそそり立った時も、私には全く死の不安はなかった」と回想している。²⁴『大和』では「ワレハ死ヲ知ラズ 死ニ觸レズ」「死トノ對決ヨリワレヲ救ヒシモノ、戦鬪ノ異常感ナリ」とも書かれている。²⁵

吉田は生還してからすぐの頃は、すさまじいひとくさに揉まれた自分はちょっと他人とは違うのだ、という人を

見下ろした態度も実はもっていたと告白している。だが賜暇帰省で実家へいったとき、ふと戸棚に自分が両親へ宛てた電報（自分が大和から生還し一時帰省することを両親へ伝えた電報）を見つけ、その文字がほとんど判別できぬほど涙でにじんでいたのを目にする。そのとき彼は、自分が生きている、ということがこんな力をもっていたということに霹靂を感じ、その涙の暖かみ、透明さ、強さに心をとめることなく驕慢になっていた自分を強く反省する。自分は決して「死」を知り尽くしたわけではなかった。「死には本来何か予期されぬ運命的な含みがある。だから特攻の死はむしろ死とよぶにふさわしくなく、生と死の、実験的切断とでもいうべき味気なさをもっていた」、それなのに、「そのような唯一の特攻の経験から、自分が生死の境を往来したかのように思いあがるほど愚かなことがあるのか」と自らを振り返るのである。

吉田はあの「死」の体験を注意深く咀嚼することで、戦争の悲惨さの意味を考えようとする。彼によれば、戦闘が苛烈だったから悲惨だったのではない。強い人生観が欠けていたから悲惨だったのではない。また立派な死生観を持たなかったから悲惨だったのではない。そうではなく、死に近接しておりながらも自分の人生を目を開けて振り返ることができなかったその空虚さを直視できず、またその空虚さをあばいたところでどうすることもできなかったことが悲惨だったというのである。²⁷ もうこの平和な戦後においては、「自分はいつでも死んでやるのだ」と自負することは許されない。それまでは生を見ずに死だけを見つめてきた生活であったが、これからは全てが太陽のもとで永遠に明々白々に残るのだと自覚せざるを得なかった。だがそれは当時の吉田にとっては、耐え難く気が重いことでもあったという。それまでの「死」に対する一種の麻痺的状态は、「生」を不安や重荷と感じる心情へと変化していく。吉田の言葉でいえば、「いつでも死ねる」という武器をとりあげられた不安²⁸である。では彼はどのように戦後を生きていけ

ばよかったのであろうか。それは決して戦争体験の一切を忘却したり否定したり、あるいは他者にその責任があるとして誰かを批判するようなこともなかった。自分の「体験」はそれが何であろうと自分で担うしかない。彼の思索は自身の内側へと沈潜していく。

「体験は、だが結局それだけのものでしかない。一つの体験が真に血肉となるには、さらにそれが他の体験によって超えられることを要する。終戦が来て、平和が訪れ、身边が平静にかえるに従い、私は自分に欠けていたものを、漠然と感じはじめた。死に臨んでの、強靱な勇気とか、透徹した死生観とかが、欠けていたのではない。静かに緊張した、謙虚に充実した、日常生活が欠けていたのである」²⁹

特攻の体験、すなわちどうして死ぬか、という課題と向き合ったことは、どうして生きるか、という新たな課題と向き合うことによつてはじめて一つの体験として意味あるものになるというのである。戦後すぐに執筆した『大和』に対する賞賛と批判、そして自らの特攻死の体験を振り返る日々の中、前章で述べたような神父との出会いがあった。そして彼はやがて信仰的なまなざしをもって生活するようになっていく。「俺は愛したい。献身したい。ひとに押しつけひとを叩くための議論ではなく、そのためにこそ自分が生きているということだけを語りたい。そしてそのように生きたい」³⁰、吉田はこう書いている。彼は自分の生をあらためて見つめる際、そこにはすべてを超える絶対的存在が必要であると感じた。死をまぬがれたことでかえって生に執着するのではない。「死から充分にへだたり、生きることが平凡な確かさを持つているとき、そこにこそ死がある」³¹とも述べ、特攻のような「死ノ小實驗」ではなく真の意

味での死を迎えるためにこそ、当たり前のような平凡な日常を永遠の相のもとに見つめようと考えたのである。

「私はみめぐみに協力の手を差しのべ、神を実感する。神を愛し神を祈る。神は愛しこたえたもう。墮落と昇華、精神と肉体、理想と現実、永遠と時間、あらゆる矛盾の相剋にある私は、この献身の一行為をもって、自然と超自然とを接合する。私はもとより朽ち果てるべきものであり罪と無知とを免れ得ざる者である。だが日々に浄化のときを持つ。祈りにおいてみ前にわが身を捧げ、愛をもって聖寵を保つ。未熟にして愚かなれども、無限の希望に燃え謙虚なるかぎり不安動揺を知らぬ。一日の生が、死への一日の接近であることをしかと受けとり、ますます悔いながらんことに力をつくす。孤独を恐れず、むしろそのときを貴しとし、愛をみがく。愛のゆえに奉仕し、読書し、犠牲を求め、また悦楽する。この胸にはつきざる歓喜と平安とがある。かく生きることにつくしつ、刻々の死を凝視する。そしていつかは私にも死が与えられるであろう」³²

この引用は「死・愛・信仰」の最後の部分であるが、彼は同じ年に『カトリック新聞』にも「死を思う」というエッセーを載せており、その最後の部分がこれと大変よく似た表現で結ばれている。右の引用の最後は「そしていつかは私にも死が与えられるであろう」となっているが、「死を思う」の最後の部分も、「正しく生きたい。死とともに生きつづきたい。いつか、死が与えられるであろう」という一文で終わっているのである。³³死は「与えられる」ものであつて、生を「奪われる」というものではないといった捉え方は、おそらく当時の吉田の新しい発見であり、彼における信仰的生の自覚を象徴しているように思われる。森平太も指摘しているように、吉田の信仰を貫く最も深刻なテー

マは「死」であり、吉田自身も自らの入信の動機を、あくまで「死の体験」によると自覚していた。³⁴ 一晚で『大和』を書いた一九四五年から亡くなる一九七九年まで彼は「死」について考え続けたが、しかしそれは決して恐怖や不安としての「死」ではない。特に受洗後の吉田において、死を考えるとすなわち生の意味を考えることであり、それは平安に満ちた信仰的思索だったのである。

いざ死に直面した時に、特殊な悟りや死生観が都合よく自分を助けてくれることなどありえないということは、吉田は特攻のあの日に海上を漂いながら痛感していることであった。彼は「平凡な毎日を生きている、ありのままの自分、頼りになるのは、それだけである」³⁶ という。神父との出会いなどをとおして、最期の日まで自分を偽らずに生きることはすなわち自分を超える絶対の存在にわが身をささげることにはじまる、と考えるにいたるのである。ただし重要なのは、信仰をもって生きるということは、何らかの教義や教えを鵜呑みにすることで不安や疑問を感じなくなることを意味するわけではないという点である。吉田は次のように述べている。

「はつきりした解決の与えられない、立ちと、おぼろげにしか主をとらえることのできない不安が、最後の日まで私たちをおおうでしょう。しかしそれが、主から与えられたかけがえのない私自身の生なのだ、と思い知るべきです」³⁷

吉田にとって信仰とは、決して何らかの安心感を得たりする手段とは考えられていない。³⁸ また普遍的、超越的立場に向かうことで戦中派の一人という具体的状況から距離をおき、現実の葛藤と関わらずに済ませようとする態度でも

ない。次章で平和論について見ていく際に触れるが、むしろ吉田は具体的な歴史や体験や現実に拘り続けている。彼において「信仰」とは、それまでの人生をリセットして新たに生き直すことではなく、あくまでも泥臭く血みどろの死の体験の延長として今後を生きる覚悟であつたように思われる。信仰をもつとは、自分ひとりが救われうるかどうかという問題ではなく、「この現実の世界の中で、何に對し何を証しするかの命題を負う」こととして捉えられねばならないと吉田はいう。信仰的な視点と特定の歴史的状況への視点、この二つの極のあいだを行き来する点に彼の思索の特徴があるともいえよう。

ところで吉田は学生時代には宗教とほとんどかわりがなかったという。彼によれば、当時は人並みに「人生とは何か」という疑問をもつてはいたが、しかし宗教そのものに対しては批判的でさえあつたと述べている。しかし筆者は、実際のところ吉田にはもともと宗教や宗教的なものに対する関心があつたことは確かだと見ている。その根拠は、軍隊生活が始まる以前すでに、彼が東大法学部と同級生であつた和田良一に宛てた書簡で、「この二箇月、僕は次のことをして行きたい。あの創作の完結、仏教思想研究の熟読、キリストへの接近、このさいこのものに就いて僕は近頃非常に惹かれて⁴⁰いる」と書いているからである。この「あの創作の完結」というのが何を指しているのかは不明だが、後半の記述は説明を要しないであろう。さらにまた高校からの同級生である志垣民郎宛ての書簡にも、「先日のパウロの本は啓蒙的だが良書ではないと思つた。今、キリスト教の根本に関する本をよんでゐる。君によませたい本が一冊ある。すべて出直さなければならぬ。神について余りに常識的だつたことがぐやしい⁴¹。」という一文も見られる。いずれの書簡も一九四三年の一〇月に出されたものであり、武山海兵団へ入るのは同年十二月であるから、特攻はもちろん軍隊生活すら経験していない時のものである。文通相手との文脈は不明であるから安易な断定はできないが、少

なくとも宗教やキリスト教について全くの無関心ではなかったことは確かだといえよう。彼は何箇所かで、神父との出会い以前はとにかく自分が宗教と関わりが薄かったかを書いていますが、それは信仰を意識してからの生活の変化がそれだけラディカルなものであったことを示していると解釈するべきであろう。

学生時代の宗教に対する関心は、彼によれば、あまりに「主知的」で、「思想の一体系をそこに期待していたに過ぎなかった」⁴²。かつては宗教という営みを蔑視していたこともあるといい、そこには理性に対する信頼というものが大前提としてあったのだと回想している。だが戦後になると、理性が全能であるか限界をもつかをあらかじめ決めてかかることこそ非理性的だったと反省するようになる。先ずはあくまで理性的であることを地道に貫き、万一理性で処理できぬものにぶつかったときは、そのものの内容ではなくそれにどう対処すべきかを理性的に解いてかかり、そしてその結論を受け入れることを理性的と称することにするという⁴³。吉田は生に関する根本的な問いについて、与えられた何らかの答えの真偽を徹底的に解く鍵を持たぬからこそさなる疑問が提起されるのではないかと述べ、その問題が解答を得さえすればそれで氷解するようなものであるならば、それは最初から本当に深刻な問題ではないのだと考える。もし人がただ質疑と解決とをくり返すのみならば、いつ真の理解がもたらされるのか、そもそも純粹に知的な知識というものが有り得るのだろうかと問い、「何らかの権威に対する信頼に基づかずにはいかなる認識が可能であるというのか」⁴⁴というのである。この「何らかの権威」とは彼の場合すなわち「神」であることはいうまでもない。実存的な問いには神的な権威のみが対応できると考えたのであろう。

吉田の信仰生活はしかしすぐに第二の変化を迎える。彼は受洗してまもなく、カトリシズムとプロテスタンティズムのあいだで苦悩を感じるようになるのである。吉田は一九四九年に見合結婚をするのだが、述べたように相手の女

性嘉子は熱心なプロテスタントの家庭で育てられた人であった。最初のころ吉田は、カトリックとプロテスタントの差異など純粹な意味で信仰そのものを深めていくことにおいて克服できると考えていたようである。しかし「カトリック教会のみが唯一の眞の教会である」というカトリック側の主張に嘉子は納得できず、吉田本人も両者の関係や信仰理解について再考せざるをえなくなった。結婚成立以前もそれ以降も、教会の眞理性と救いの意味について、二人は眞剣に語り合うことになったのである。

この時の吉田の悩みは、現在のわれわれの想像以上に深かったものと思われる。というのも吉田がこの問題と向き合わされた一九四九年という時期は、カトリック教会はまだ他教派との交流や相互理解に積極的ではなかったからである。キリスト教界全体としては、一九一〇年のエジンバラにおける世界宣教会議などを皮切りに超教派的な宗教者の交流が生れてはいた。しかし、カトリックにおける他教派との交流に向けての大きな動きは、ヨハネス二三世によって開かれる一九六二年から六五年にかけての第二ヴァティカン公会議以後からだったからである。吉田が二つのほざまで悩んでいた時代は、少なくともカトリック教会の基本方針は、まだ決して十分に寛容でも前向きでもなかったのである。吉田はその頃のことを次のように述べている。

「かつて私が、二つの教会のいずれに就くべきかと悩み苦しんだ時、教えを乞うたほとんどすべての人は、好戦的な明るさをもつて、相手側を論破した。議論だけで道が開けるなら、どんなに容易だろうと、私は絶望的に考えた。さいごに会った外国人の神父だけが違っていた。黙って私の話をきいて、長い沈黙の中で、じつと私の瞳の中をみつめるばかりだった。その目には、ひとごとでない痛みの色があった。自分自身、分裂の重さと傷に堪えているよ

うに思えた。そしてさいごに言われた。「祈りの中でこそ、私たちすべてが主に一致しうることを信じ、お互いに祈りつづけましょう」と⁴⁵

「私が相談した日本人の神父はこう言われた。「譲り得ぬことはもちろん譲るべきではない。真理をよそにして真の平和はない。しかしいかなる場合にも神に祈るということにおける一致はあるのだ」。ドイツ人の神父はこう言われた。「争うな。議論するな。祈れ。ただ祈り、信仰を深めるのみ。そして妻を心から愛するのみ」。そして頭を垂れ悲痛な面持ちで長く祈られた。プロテスタントの牧師はこう答えられた。「教会のうちに、すなわち十字架の上には真の解決はない。家庭に暖められた妥協ほど悪しきものはない。あくまで良きカトリック信者であるように」⁴⁶」

嘉子もその母も、むしろ吉田がカトリックにとどまることを望んでいたという。しかし吉田は結局プロテスタントへの改宗を決断する。ただしそれは嘉子やその母に気をつかつたからでは決して無かつたようである。確かにその改宗は婚約と結婚を一つのきっかけとするものではあったが、吉田はあくまで「信仰」をどのように捉えるかという問題として考えたのである。結婚式は日本カトリック教会世田谷教会で挙げたが、やがてプロテスタントの日本キリスト教団駒込教会（後の西片町教会）に通うようになる。ただし吉田がその教会員になったのは結婚後八年もたったからのことであつた。千早耿一郎は「その年月に、吉田の苦悩葛藤を見る思いがする」⁴⁷と述べているが、確かにその通りであろう。この改宗について吉田は右眼失明直後の「底深きもの」に比較的詳しく書いているが、彼の悩みや決断のポイントは十分に明確とはいえない。森平太も吉田の改宗については「深い謎のような出来事」と表現している。⁴⁸

ただしいずれにしても誤解されてはならないのは、吉田は決してカトリック教会を否定することによってプロテスタントへ改宗したというわけではないという点である。彼はカトリックについては「私は自分の、カトリシズムに対する郷愁を否定しない。あの告解やミサの無類の体験を否定しない。あの壮大な抱擁的な立体感を否定しない」⁴⁹と述べ、また「カトリシズムの堅固な克己と努力の信仰もすて難い。プロテスタンティズムの真摯な捨身な信仰も本物だと思う。いかなるその相違も表裏として見れば一体に過ぎない」⁵⁰と述べている。ルターの「信仰によつてのみ」という言葉をタイトルとした一九六四年のエッセーでは、自分たち（プロテスタント）は本当に誤りから遠い位置にいるのかと問いかけたうえで、「信仰によつてのみ」生きるということは、全く容易ならぬ試練の道なのではないか。正しい教会合同への道も、このような信仰の戦いの延長の上にのみあるであろう⁵¹と結び、決してプロテスタントを選んだことの正しさや優越性を主張するのではなく、将来も自分たちは課題を抱え続けることを自覚した態度を示している。

吉田は信仰に関する文章のなかでも「イエス」について言及することは稀であるが、改宗以前もカトリック特有の概念や事柄を論じることがほとんどなかった。それはおそらく、彼の信仰の出发点はあくまで「死」の問題であり、それを考えるうえでは端的に「神」という究極的な価値の基準が重要だったからかも知れない。生還して平和が訪れてからの印象を吉田は次のように述べている。

「私は、あの器械的な動物的な死が奪われて、なごやかな、明々白々とした日常しか残されていないことに、愕然とした。すべてが、克明に、淡々といとなまれてゆく、つねに自己をみつめ、一日の生に悔いなきを期し、一瞬一

瞬に自分を超えること、そのみが、死に備える途と思われた。したがって、生を全うする途でもあった」⁵²

吉田は、悔いなき人生のためには「自分を超える絶対の存在」⁵³に身をささげることが必要だったとも述べている。壮絶な「死」の体験から「生」を捉えなおすことを求めた吉田にとっては、教会の伝統や権威よりも、「信仰のみ」「聖書のみ」「万人祭司」という原則の方が受け入れやすかったのかもしれない。

四 平和とその宗教的次元

吉田は妻嘉子との出会いをとおして二六歳のときに鈴木正久牧師と出会っている。当時鈴木牧師は三七歳であった。吉田のカトリックからプロテスタントへの改宗において、鈴木牧師からの影響を直接示唆するテキストはない。だが吉田は生涯一貫して鈴木牧師を信頼しその思想や生き方に感銘を受けており、彼との出会いが吉田の信仰生活に大きな影響を与えたことは確かである。

鈴木牧師は日本基督教団宣教研究所委員長や伝道委員長、常任議員などを歴任するが、その名を特に有名にしたのは、日本基督教団総会議長に選出された翌年の一九六七年のイースターに、総会議長の名で公表した「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」（以下戦責告白と略記する）である。それは約一千字の短い文章であるが、戦争の過ちを率直に認めかつ日本基督教団の設立そのものの問題にも言及するもので、それを支持する側と批判する側との間で激しい議論を巻き起こすものとなった。戦争責任を教団として謝罪することの意味について、あるい

は国策による教会の合同の意味を神学的にどう理解すべきかなど、さまざまな点から論争の種となったのである。その詳細については大変多くの文献があるので、ここでは吉田の言及についてのみ確認することにした。

戦責告白発表の直後における吉田の反応を示すテキストはなく、それに関する彼の言及は、まずは六年後の一九七三年に発表した「戦責告白と現代」に見られる。彼はそこでは明らかに戦責告白の意義を肯定的に評価している。吉田は戦責告白を、「過去への贖罪にとどまらず、戦後日本が再び憂慮すべき方向に向かっていることを恐れつつ、主の助けと導きによって、教団が日本と世界に負っている使命を正しく果たそうとする決意を表明している」⁵⁵ものとして重要な意義を持つていとするのである。彼が約六年の間においてこの時期に戦責告白に触れた理由は、一九七二年という年を、二回の世界大戦を遂行しかつ戦後処理にあたってきた体制が崩壊して新しい秩序がはじまった「歴史を転換させた決定的な年」⁵⁶と見るからである。このエッセーは『西片町教会月報』に掲載されたものであるが、教会の月報にもかかわらず内容は国際政治・経済等に関する分析が半分以上を占めている。ニクソンの訪中、訪ソ、そしてベトナム停戦、そして欧州経済連合の発足などに触れ、現時点は米・中・ソ・EC・日本を中心としたブロック対立の世界になりつつあり、そこに第一次および第二次大戦前夜との恐ろしいまでの類似があるという指摘などがなされている。だが吉田がそうした国際状況について述べる根底には、その時点での日本の現状に対する大きな不安と不信感がある。彼によれば日本の現実には憂慮すべき方向に直進しつつあり、かつてよりも大規模に世界の中で孤立化する道へ向かっているという。その具体的な根拠はあまり明確には挙げられていないが、彼は「われわれの精神構造には戦前よりも劣る面がある。戦後の日本人には確立された価値観がない。共通の理解がない。したがって外に向かつて、一貫した立場、節操がない、目につくのはその場主義の計算である。発言は多いが行動は鈍い。平和国家を誇り

にしているが、現実の平和に貢献した実績はない。みずからの痛みにおいて世界の平和に協力した経験がない」⁵⁷と厳しく批判している。七〇年代初頭の日本の状況に対する危機感があらためて戦責告白の意義を彼に想起させたように思われる。

そしてそれからさらに三年後の一九七六年、吉田は再度「戦争責任告白を考え直す」と題して同じく『西片町教会月報』に文章を載せているが、そこでもやはり日本の危機的現状を指摘している。日本はその年にオイルショックと不況をようやく克服したがロッキード事件を契機に政局は混迷の極に達し、国民は信ずべき価値観や目標を見失って戦後最大の危機に直面しているといい、そのうえで彼は鈴木牧師の戦責告白の要点とそれへの批判に対する鈴木牧師自身の反論を紹介している。ただしいずれも戦責告白に関する文脈では、吉田自身の平和に対する考え方はほとんど述べられていない。では彼は自らの戦場体験、特攻による死の体験と、そしてキリスト教信仰とをとおして、平和についてどのように考えていたのだろうか。

吉田は戦中派として、平和の問題とは、まず何よりも痛みを伴う自分の生の意味を賭けた問題であり、「気持ちのいい議論や景気のいい宣伝とは全く無縁の、泥まみれな、血みどろの世界であることを身をもって知らされている」⁵⁸のだという。彼は目を背けることのできない現実に基づいて「平和」を考え抜こうとするが、しかし同時に、「神」という究極的な存在を中心とした宗教的地平にも立っている。本稿冒頭にもあげた吉田の次の言葉を見よう。

「肉の重荷を負った人間は、美しい抽象的な「平和」そのものを、生きることではできない。それぞれにあたえられた役割を果たしながら、「平和」を求めて自分を鞭打つことだけが、許されているのである」⁵⁹

この「肉の重荷を負った人間」というのは宗教的な言い回しと解釈されてよい。人間は「肉体」をもっているという当然のことをあえて言うのは、「肉」に対する「霊」が意識されているからであり、現に吉田はこの文章の前で、新約聖書「ローマの信徒への手紙」の第八章を引用している。「肉に従って歩む者は、肉に属することを考え、霊に従って歩む者は、霊に属することを考えます。肉の思いは死であり、霊の思いは命と平和であります」（八章五―六節）。「神の霊があなたがたの内に宿っているかぎり、あなたがたは、肉ではなく霊の支配下にいます。キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません」（八章九節）。しかし多くの人間は、実際には完全に「霊」や「神」の次元でのみ生きていくことなどできない。生きているとはすなわち「肉の重荷」を背負うことであり、それは窮極の理想をこの世で実現することの困難ないしは不可能性を暗示している。吉田が「肉」として自らの存在を意識することは、すなわち神からの距離、あるいは「五体の内にある罪の法則」⁶⁰の確認を意味している。「美しい抽象的な平和」というものを決して諦めることなく心に抱きつつも、しかし現実の困難を直視するならば、それぞれに課せられた使命を淡々とこなすことこそがわれわれ人間に唯一可能な「平和」への道だと考えているのである。同じエッセーの中で吉田は、「私」からはじめる線は、どんな方法によっても、救いや自由にはつながらない」と述べたうえで、神学者カール・バルトの『ロマ書』の思想として、「イエス」からはじまる線の上でだけ、自分自身から解放され、霊によって生きることができるのである」と述べている。⁶¹

吉田のこうした記述は、ある種の平和主義に対する批判とも連関している。吉田はもちろん「平和」を望んでおり、そのためにこそ、自分の経験したこととその後の内面を赤裸々に書き綴るのである。だが彼が「平和」を希求するときの姿勢は、決して単に平和に対立するものとしての戦争の一方的な拒絶ではない。彼は一部の平和主義者に対して

次のようにいう。

「戦争はいやだから協力したくないというのは、平和への一つの出発点にはなりえても、それにとどまるならば、戦争否定ではなくて、戦争からの逃避に過ぎないでしょう。自分だけは戦争で手を汚したくないという自己中心の発想から、平和への地道な活動が生れた例はありません」⁶²

これと同じ主旨の主張は他にも複数の箇所で見られる。「単に戦争の害悪を強調し、戦争憎悪をかきたてるだけの反戦論」は「無意味ではないにしても、戦争を阻止するうえで無力」だともいう。⁶³戦争を避けようとつとめ、戦争を悪だと考えることそれ自体はもちろん正しい。しかし、終戦直後に『大和』が戦争肯定の文字、軍国主義鼓舞の文学として強く批判されて以来、吉田はあまりに単純な戦争否定や平和主義の風潮には顔をしかめざるをえなかったであろう。戦後の一部の平和主義を唱える人々は、自分をはじめから戦争に批判的で、戦争をひき起す権力を憎悪するとさえ主張すれば、それがそのまま平和論になるとタカをくくっていたという。⁶⁴戦争否定の言動というのは、実際には、その意志さえあれば誰でもできるようなものではない。ましてや戦時下でそのように行動することは実に困難であるにもかかわらず、戦後になったとたんにそれが当然なされるべきであったという主張がまかりとおるようになってしまったことを、吉田は「クレイ事の風潮」だといい、そうした雰囲気の影響がむしろ「戦後日本に大きな欠落を生んだのではないか」とも述べている。⁶⁵戦争は「平和平和」と叫べばなくなるようなものではない。にもかかわらず口先でそれを繰り返すのは、もはや「子供じみた空想でなければ、何らかの意図をもった宣伝でしょう」⁶⁶とさえいう。実

際に大学生活を中断させられ軍隊に入り、最後は特攻まで命じられた吉田にとって、現実には戦争を拒絶することの困難は身に試みている。吉田は憲法九条については、「日本が平和憲法を作り、国家としての新しいゆき方を世界に示したことは立派であつたし、今日まで戦乱にまきこまれることなく過⁶⁷ごしてはきたが、それは平和憲法に支えられたからというよりも、むしろ幸運であつたと見るのが事実に近いであらう」というコメントを残している。平和を求める姿勢はもちろん重要であるが、それは道徳的な叫びとしてではなく、あくまで現実との葛藤として希求されねばならない。吉田は絶対平和主義の主張が九条の評価につながるかどうかに関しては、やや慎重になっていたようである。

吉田は一部の反戦論や平和主義の背後にある現実認識の甘さや無責任さを批判しているわけだが、しかし間違つた戦争は否定するが正しい戦争はやむを得ない、という思想にも断固反対の考えをとる。「ある意味からは望ましい戦争、というものはありえない。平和への手段としての戦争などというものは、それ自身一つの矛盾に過ぎないのだ⁶⁸」という。いわゆる「正当戦争論」(just war)は、キリスト教思想史に限ってみても、アンブロシウスやアウグスティヌスから現在にいたる一六〇〇年以上の議論の歴史がある。トマス・アクィナスやマルチン・ルターも条件付きでは武力行使を認める文章を残しており、キリスト教において絶対平和主義の態度は、実際には、一部のマイノリティによってのみ維持されてきた⁶⁹。だが吉田はどのような理由があろうと戦争を正当化することは認めず、そのような議論が今まで戦争の絶滅を妨げてきたのだという。正義の戦争ならば支持し、不義の戦争には反対するという立場は過去も現在も優勢だが、人類の歴史はそのような見方の正当性を裏付けてはいないというのが彼の固い信念である。ただ彼が自覚しているのは、平和運動が必然的にもつ困難さである。平和への歩みそのものの中には、「戦い」という要素を内包することが許されないため、それは本質的に受身であり、内向的だというのである。戦争の暴力に対して平和運動

が無力で終わらないためには、「受身の本質を失わないままで、しかも受身から攻勢にかわる転機を、見出すことが必要となってくるのだ⁷⁰」という。だが彼のいうその「受身から攻勢にかわる転機」というのが具体的にどのような状態ないしは行動のことを指しているのかについては、「英知」や「情熱」といった言葉で説明されているだけで、あまり明確には述べられていない。吉田は一方では「平和を」と叫ぶだけの反戦運動を冷ややかに見つめるが、同時に戦争そのものは断固と拒絶し、いかなる状況や条件のもとでも戦争を許さないことが平和のために不可欠な態度だとするのである。こうした部分と連関してもう一つ彼のなかで注目すべき部分は、「日本」という社会ないしは「日本人」というアイデンティティに対する捉え方である。

吉田によれば、戦中の日本はある意味でアイデンティティ過剰であった。当時は日本人であることや日本という国家の枠だけが強調され、実体のない形骸だけが神聖化されたという。だが一九四五年八月一日以降は、そういう一切のものに拘束されない「私」の自由な追求が最優先されるようになった。彼によれば、本来終戦はそれまでのアイデンティティの中身を吟味して、取るものは取り捨てるものは捨て、その実体を一新させる好機であったが、当時はそれだけの余裕はなく、アイデンティティのあること自体が悪の根源だと見なされ、それは無用であるのみならず幸福のための障害であるとさえみなされるようになってしまった。その結果、公的なものへの奉仕、協力、献身は、平和で民主的な生活とは相容れない罪業として退けられたという。日本人としてのアイデンティティの枠をいつまでも無視できると思い込んだところに国際社会の一員として生きる資格のない日本人特有の甘えがあつたとも述べている。自分たち戦中派は、抹殺すべきでないものまで抹殺して自らの存立の基盤であるアイデンティティまで喪失したことこの「愚」と「欠落」を黙視すべきではなかったと振り返っている⁷¹。そして吉田は「平和」について考えるうえで

もそうした「愚」と「欠落」の自覚のなさは引き継がれてしまっているという。

「自分は日本人であるという基盤を無視し、架空の「無国籍市民」という前提に立って、どれほど立派な、筋の通った発言をくり返そうとも、それは地に足のついた、説得力のある主張とはならないであろう。平和、自由、民主主義、正義。そのどれを叫んでも、言葉が言葉として空転するだけで、発言は心情的に流れ、現実の裏づけがないのである」⁷²

日本人であるという事実を超越した立場から平和について語ることが当時も、また現在も一部でなされているが、吉田はそのような議論の意義を認めない。彼は別のエッセーでも、「世界は一つ」の美名のもとで無国籍者のように戦争と平和を論ずる立場も「無責任」だと批判し、絶対平和主義そのものは認めるものの、あくまでも「現実の、われわれにとつての平和を追求することによって、日本人としての責任を果たすべき」だというのである。⁷³ われわれはまぎれもなく日本人であつて、それを無視ないし軽視するのはすなわち現実の具体的状況の無視や軽視に他ならず、そのような前提に立脚した平和論は夢想でしかないというわけである。ただし吉田のいう日本人のアイデンティティというものは具体的にどのような内容をもつものなのか、それは残念ながら結局明確に示されていない。だが彼が「日本」というものに拘るのは、決して戦中の国家主義的意識を引きずっているのではなく、現実の平和を欲するならば現実にある国家という枠組みを意識せざるを得ないという彼なりのリアリズムによる判断でもあろう。吉田はある箇所で、「私はこれまでの議論を通じて、戦争協力責任の実体は、政治の動向、世論の方向に無関心のあまりその破局

への道を全く無為に見のがしてきたことにあるとの結論に達した⁷⁴」とも述べており、日本のアイデンティティをきちんと意識することがすなわち日本の政治や世論を正面から見据えることと連関すると考えられているようである。

もちろん国家間の協力や協調は必要であり、国家の制約を超えた共通の理解に基づく判断や行動が要請されるであろうことは吉田も十分に認めている。しかしそれは決して国家という枠組みの否定であってはならない。吉田によれば、少なくとも今の歴史の段階においては、国家は世界政治運営の基本的な体制として一つの役割を果たしており、これを全面的に廃止すべしとする根拠はまだなく、「国家という枠をはなれて、いかなる場合にも一切の戦争協力行為を拒否する絶対平和主義の立場は、平和推進のための一つの牽引力ではあるが、これに現実の平和世界の建設を期待することは出来ない⁷⁵」と断言する。

ところで吉田のこのような考え方は、単なる国家観というだけではなく、キリスト教信仰に基づいた態度の延長として解釈することも可能かもしれない。というのも、吉田が晩年に書いた、新約聖書「ルカによる福音書」第三章一〇節を主題とした短いエッセーがそうした態度を示唆しているようにも読み取ることができるからである。聖書のその箇所は次のような場面である。洗礼者ヨハネが、洗礼を授けてもらいにやってきた群衆を前にして「斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる⁷⁶」という。すると人々は必死になって「では、わたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねるのである。それに対してヨハネは、「下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者にわけてやれ。食べ物を持つている者にも同じようにせよ」と答える。すると徴税人もやってきて自分はどうすればいいのか聞くと、ヨハネは「規定以上のものは取り立てるな⁷⁷」といい、兵士には「だれからも金をゆすり取ったり、だまし取ったりするな。自分の給料で満足せよ⁷⁸」と答えるのである。吉田はこの洗礼者ヨハ

ネの受け答え方について、それらは群集からの問いに対して正面から結論を与えてはいないように思われるという。吉田は「ヨハネの答えは、おのれの分をわきまえよ、おのれの分を越えてむさぼるな、ということにつきる」として、「何をするか」に答える前に、背伸びせずに自分が「何であるか」を問いなおすこと、足もとをみつめなおすことが必要であると、ヨハネは説き明かしているように思われる」と解釈するのである。⁷⁶「何であるか」の問いかけこそが、最も重い命題であるとして、この命題の追求の過程でもし「何をするか」の答えがえられたならば、それに従うという姿勢を持ちつづけたいという。「自分の足場をはなれて、われわれに訴えかける外部のさまざまな力、社会の動きの中から、「何をするか」の指針を見出すのではなく、あくまで自分が「何であるか」の究明に固執したい」。⁷⁷吉田はこう述べ、そこから自分自身について、「自分がこの現代に生をうけた日本の一キリスト者であり、多くの仲間を戦争で失った戦中派の生き残りであり、体制側に属して戦後日本の復興に協力した社会人であり、日本がふたたび世界の孤児となることを憂え、世界の期待に日本人が何をもつてこたえるかに心を砕く同志の一人であるという現実から、眼をそらさないようにしたい」⁷⁸と自らの「何であるか」を再確認している。すると、吉田が「無国籍市民」ではなくあくまで「日本人」の立場から平和を考えようとするのは、決して偏狭な国家主義ではなく、彼がヨハネから読み取った「分をわきまえる」姿勢、すなわち、自分が「何をするか」よりも「何であるか」を考えることがより大切だと考えた結果だと解することもできるように思われるのである。

そして吉田の平和論はさらに明確に宗教的な次元を指し示す。彼はこの世で平和を求めるということは、単に自分たちの快適さのためなのではなく、神が窮極的には支配したもうこの世界の中で自分のなしうる限りのことをすることであると述べ、⁷⁹また真の平和運動は信仰的な深さに根ざした力を包含するところまで発展すべきであるともいうの

である。⁸⁰そして彼の考える平和の理念を可能にするのは「愛」であると結論される。無抵抗の抵抗、真の平安に支えられた平和への道に進むことを可能とするものは、「それは言うまでもなく、愛、つぎることを知らぬ愛だけである」という。⁸¹「平和は、まず何よりも「愛」でなければならぬ。それも、知恵を働かせた小回りの愛ではなく、大きな徹底した愛であるべき」⁸²なのである。だがそれでは、その「愛」とはいったい何なのだろうか。吉田はそれについて次のように述べている。

「自分と相手の対立のすべてを包むより大きなものを確信し、その大きなものの意志が少しでもあらわされるように心を砕くこと、自分の敗北、絶滅への脅威ではなく、人間性に対する心底からの信頼を回復しそれに呼びかけること、自分の世界が支配力をもつことへの野望ではなくて、われわれ全体に祝福が与えられるよう切望すること、これこそが愛であり、平和への道でなければならない」⁸³

平和について語るうえで、吉田は最終的には「愛」という概念をもちいる。平和とはあくまで現実社会の問題であるが、同時に宗教的な次元による裏打ちが求められる。吉田によれば、平和は常に尊く戦争は常に悪である、という信念を純粹に結晶化したものは宗教的な平和論であり、万人がこの高さにゆきつくことを求めるのは無理であろうかもしれないが、これはあらゆる反戦論の一つの核だとされる。⁸⁴「平和平和」と叫ぶだけの反戦論は無意味だとされ、しかし絶対平和主義の立場それ自体は肯定し、いかなる場合においても正当戦争論的な立場は退けられる。また同時に日本人としてのアイデンティティを重視し、国家の枠組みを維持する重要性を論じつつ、そのうえで成り立つ「平和」

は窮極的には宗教的次元としての「愛」を骨格とすることによってしかありえない。

吉田の平和に対する見方は、戦中派、特攻体験者としてあくまで現実との葛藤を無視してはありえないものであったが、その彼なりのリアリズムはあくまで信仰の土台の上でこそありうるものなのであった。戦後の吉田は、単に現実生活における都合のよさという点から平和を求めたのではなく、この世における神の究極的な支配への参与として、平和を捉えていたように思われる。

五 むすび

吉田の五六年の人生にもっとも大きな影響を与えたものは、戦艦大和とキリスト教であった。戦後の「死」や「平和」についての彼の思索は、特攻体験の記憶と神への信仰との二つの極のあいだで営まれたといってもよい。

『大和』に関しては、それをノンフィクションと捉えるかそれとも吉田の体験に基づく創作と捉えるか、同じ生還者や関係者たちのあいだでも様々に議論がなされている。⁸⁵ これも事実認識という点では大変重要な問題ではあるが、吉田満という人物が残した最も本質的な問いかけは、あくまで生や平和に関する問題であることを忘れてはならないであろう。吉田は同じ特攻で死んだ仲間たちを思い出して次のようにいう。

「死に果てたかれらの、いまはの心には、俺たちへの、精魂こめた希願が盛りこぼれていたのだ。もろともに捕らえられていたこの愚かしい狂乱のうちから、生きのこった俺たちに、その毒をきよめて新生を吹きこむちからを、

切望していたのだ。

かれらは、も早やいない。だがかれらを生かすも殺すも、ただ俺たちの生き方にあるのだ。凄惨な苦闘の外貌に欺かれず、そこにちりばめられた、愛、価値、宿命を掘り起こし、みがいてゆかねばならぬ⁸⁶」。

本稿冒頭の引用にもあるように、われわれは美しい抽象的な平和そのものを生きていくことはできないかもしれない。だがそもそも平和への取り組みというものは、それ自体を目的とした何らかの運動というよりも、究極的には、生還後の吉田がそれまでの自分に欠けていたと悟ったような「静かに緊張した、謙虚に充実した、日常生活」に他ならないのではないだろうか。右の引用で吉田は死んだ仲間について「かれらを生かすも殺すも、ただ俺たちの生き方にある」という。戦争の悲惨さや平和の大切さの意味は、既に定まったものとしてあるのではなく、残された者のその後の生き方を通して紡ぎだされていく。そう考えた吉田が、戦後の日常生活を信仰によって支えようとしたことは、彼の誠実さに他ならなかったようにも思われる。

注

- 1 吉田満「青年の生と死」(『吉田満著作集』下巻、文藝春秋、一九八六年)五七五頁。
- 2 「異国にて」(『吉田満著作集』下巻)二二二頁。
- 3 『大和』の執筆と出版の経緯、またその原稿の種類やそれぞれの異同等については、千早耿一郎『大和の最期、それから 吉田満 戦後の軌跡』(講談社、二〇〇四年)二二頁を参照。
- 4 「死・愛・信仰」(『吉田満著作集』下巻)五四五頁。

- 5 「一兵士の責任」(『吉田満著作集』下巻) 一四七頁。
- 6 「戦艦大和ノ最期」初版あとがき」(『吉田満著作集』上巻) 六四二頁。
- 7 同書、六四二頁。
- 8 「死・愛・信仰」(『吉田満著作集』下巻) 五四六頁。
- 9 同書、五四七頁。
- 10 同書、五五四頁。
- 11 同書、五五一頁。
- 12 吉田満著、保阪正康編『「戦艦大和」と戦後』(ちくま学芸文庫、二〇〇五年) 五三六頁。
- 13 だが意外なことに、吉田がキリスト教徒であったことは生前はあまり知られていなかったようでもある。たとえば親交のあった江藤淳なども、吉田の葬儀に出席して初めてそのことを知ったらしい。千早耿一郎、前掲書、八〇頁を参照。
- 14 「短歌」(『吉田満著作集』下巻) 五七八―五七九頁。
- 15 森平太「戦中派・吉田満の信仰——解説に代えて」(吉田満『平和への巡礼』新教出版社、一九八二年) 二二二頁。
- 16 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 沖縄方面海軍作戦』(朝雲新聞社、一九六八年) 六五一頁。
- 17 「死・愛・信仰」(『吉田満著作集』下巻) 五四一頁。
- 18 同書、五三八頁。
- 19 「死と信仰」(『吉田満著作集』下巻) 五六四頁。
- 20 同書、五六四頁。
- 21 「戦艦大和ノ最期」(『吉田満著作集』上巻) 一四〇頁。
- 22 「戦艦大和ノ最期」をめぐって」(『吉田満著作集』下巻) 一九〇頁。
- 23 「死・愛・信仰」(『吉田満著作集』下巻) 五三七頁。
- 24 「戦中派の求める平和」(『吉田満著作集』下巻) 六二二頁。
- 25 「戦艦大和ノ最期」(『吉田満著作集』上巻) 一四〇頁。

戦艦大和からキリスト教へ

- 26 「終わりなき貫徹」〔吉田満著作集』下巻〕二一〇頁。
- 27 「底深きもの」〔吉田満著作集』下巻〕五五八頁。
- 28 「終わりなき貫徹」〔吉田満著作集』下巻〕二一五頁。
- 29 「死と信仰」〔吉田満著作集』下巻〕五六五頁。これと同様の言い方は、翌年に書かれた「戦中派の求める平和」(一九六三年)でもなされている。そこでは、「一つの経験は、他の経験によつてのりこえられる時、はじめて一つの経験になる」〔著作集』下巻、六一九頁)とあり、「体験」ではなく「経験」という言葉が用いられているが、両者での言葉の使い分けに大きな意味はないと思われる。
- 30 「死・愛・信仰」〔吉田満著作集』下巻〕五四三頁。
- 31 同書、五四四頁。
- 32 同書、五五五頁。
- 33 「死を思う」〔吉田満著作集』下巻〕五三五頁。
- 34 森平太、前掲論文、一二三頁。
- 35 「死と信仰」〔吉田満著作集』下巻〕五六三頁。
- 36 「青年の生と死」〔吉田満著作集』下巻〕五七三頁。
- 37 「主に従う」〔吉田満著作集』下巻〕五九八頁。
- 38 吉田は、もし信仰が安心立命のための手段であれば、それは真に生甲斐を求めるということにむしろ反するとも述べており、既成の宗教にはそうした「無用の安定感」が多すぎると批判をしている(「戦中派の求める平和」〔吉田満著作集』下巻、六一八頁)。
- 39 「戦中派の求める平和」〔吉田満著作集』下巻〕六二〇頁。
- 40 「書簡抄」〔吉田満著作集』下巻〕七四二―七四三頁。
- 41 同書、七四四頁。
- 42 「底深きもの」〔吉田満著作集』下巻〕五五六頁。
- 43 「戦没学徒の遺産」〔吉田満著作集』下巻〕五四四頁。
- 44 「死・愛・信仰」〔吉田満著作集』下巻〕五四九頁。

- 45 「信仰によつてのみ」(『吉田満著作集』下巻) 五八三頁。
- 46 「底深きもの」(『吉田満著作集』下巻) 五六〇―五六一頁。
- 47 千早耿一郎、前掲書、八六頁。
- 48 森平太、前掲論文、二二六頁。
- 49 「底深きもの」(『吉田満著作集』下巻) 五六一頁。
- 50 同書、五六二頁。
- 51 「信仰によつてのみ」(『吉田満著作集』下巻) 五八三頁。
- 52 「死と信仰」(『吉田満著作集』下巻) 五六五頁。
- 53 「青年の生と死」(『吉田満著作集』下巻) 五七三頁。
- 54 この「戦責告白」に関する日本基督教団における議論については以下の文献を参照。『基督教年鑑』一九六八年版(キリスト新聞社、一九六七年)五八―六〇頁。土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史論』(教文館、一九八七年)二三七―二五一頁。
- 55 「戦責告白と現代」(『吉田満著作集』下巻) 六三四頁。
- 56 同書、六三五頁。
- 57 同書、六四〇頁。
- 58 「戦中派の求める平和」(『吉田満著作集』下巻) 六二二頁。
- 59 「青年の生と死」(『吉田満著作集』下巻) 五七五頁。
- 60 新約聖書「ローマの信徒への手紙」第七章二三節。また「わたし自身は心では神の律法に仕えています、肉では罪の法則に仕えているのです」(同、七章二五節)、「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていないさい。心は燃えていても、肉体は弱い」(「マタイによる福音書」第二十六章四一節)など(いずれも日本聖書協会、新共同訳より)。
- 61 「青年の生と死」(『吉田満著作集』下巻) 五七四頁。
- 62 「戦争体験をめぐって」(『吉田満著作集』下巻) 二〇三頁。
- 63 「平和への一步」(『吉田満著作集』下巻) 六五六頁。

- 64 「戦後日本に欠落したもの」(『吉田満著作集』下巻) 一〇七頁。
- 65 「戦艦大和ノ最期」をめぐって」(『吉田満著作集』下巻) 一八四頁。
- 66 「戦争体験をめぐって」(『吉田満著作集』下巻) 二〇〇頁。
- 67 「戦争協力の責任はどこにあるか」(『吉田満著作集』下巻) 一七九頁。
- 68 「一兵士の責任」(『吉田満著作集』下巻) 一五八頁。
- 69 cf., Roland H. Bainton, *Christian Attitudes Toward War and Peace: A Historical Survey and Critical Re-Evaluation*, Abingdon Press, 1979. Arthur F. Holmes ed., *War And Christian Ethics: Classic And Contemporary Readings on the Morality of War*, 2nd edition, Baker Academic, 2005.
- 70 「一兵士の責任」(『吉田満著作集』下巻) 一五九頁。
- 71 「戦後日本に欠落したもの」(『吉田満著作集』下巻) 一〇九頁。
- 72 同書、一〇八頁。
- 73 「平和への一歩」(『吉田満著作集』下巻) 六五七頁。
- 74 「一兵士の責任」(『吉田満著作集』下巻) 一五六頁。
- 75 「戦中派の求める平和」(『吉田満著作集』下巻) 六二二―六二三頁。
- 76 「何をするか」と「何であるか」(『吉田満著作集』下巻) 六〇〇頁。
- 77 同書、六〇〇頁。
- 78 同書、六〇〇―六〇一頁。
- 79 「戦中派の求める平和」(『吉田満著作集』下巻) 六二二頁。
- 80 「戦争体験をめぐって」(『吉田満著作集』下巻) 二〇二頁。
- 81 「平和の問題」(『吉田満著作集』下巻)、六〇八頁。
- 82 「戦中派の求める平和」(『吉田満著作集』下巻) 六二四頁。
- 83 同書、六二四頁。

84 「戦争協力の責任はどこにあるか」(『吉田満著作集』下巻) 一七五頁。

85 八杉康夫『戦艦大和 最後の乗組員の遺言』(ワック、二〇〇五年) 一六三―一七八頁、および栗原俊雄『戦艦大和 生還者たちの証言から』(岩波新書、二〇〇七年) 一八一―一九九頁などを参照。

86 「終りなき貫徹」(『吉田満著作集』下巻) 二〇八頁。

本稿は平成一九年度文部科学省科学研究費補助金(課題番号一八七二〇〇一六)による研究成果の一部である。